

青  
あおおに

白  
おに

調査  
さつさ

ジェイルハウスの怪物を倒せ!

ノプロプス くら だけんじ  
noprops・黒田研二 / 原作

なみつみ  
波摘 / 著

すずらぎ  
鈴羅木かりん / イラスト



## レイカ

北部小学校の五年生。

学校一の美少女だが、オカルト好きで変わり者のため、友だちは少ない。オカルトのことになるとまわりが見えなくなりがちで、よく幼なじみの優助を巻きこんでいる。

## 優助

北部小学校の五年生。

レイカとは幼なじみなので仲が良い。オカルト好きのレイカが暴走するのをハラハラしながらもフォローしている、心優しい男の子。サッカークラブに入っている。



## タケル

ビシヨン・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、青鬼と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているが、バレると面倒なので秘密にしている。

## ひろし

北部小学校の五年生。学校一の天才少年と言われているが、レイカ同様、変わり者のため友だちは少ないようだ。街外れにある洋館・ジエイルハウスで怪物に遭遇したというが……。



## ひろしとともにジエイルハウスに潜入した子どもたち

### たけし

南部小学校の五年生。

### 卓郎

東部小学校の五年生。

### 美香

東部小学校の五年生。

# 青 あおおに 白 鬼 ク 調査 クラブ

|                  |     |
|------------------|-----|
| 怪物調査レポート         | 005 |
| ジェイルハウスの見取り図     | 006 |
| 1 オカルト調査クラブ      | 007 |
| 2 ひろし君とタケル君      | 028 |
| 3 ジェイルハウス潜入      | 053 |
| 4 玄関ホール          | 064 |
| 5 警報ルーム          | 077 |
| 6 怪物ホカク作戦、開始     | 092 |
| 7 絵画の部屋          | 109 |
| 8 玄関ホールの死闘       | 141 |
| 9 わたしと優助の反撃      | 154 |
| 10 二日後           | 174 |
| 怪物調査レポート その2     | 186 |
| ジェイルハウスの見取り図 その2 | 187 |

# 怪物調査レポート

北部小学校オカルト調査クラブ  
報告者：レイカ

## 【CASE.1】

8月13日、ジェイルハウスと呼ばれる洋館から、「人魂」らしきものが上空にのぼっていくのを発見。我がクラブは本格的に調査を開始する。

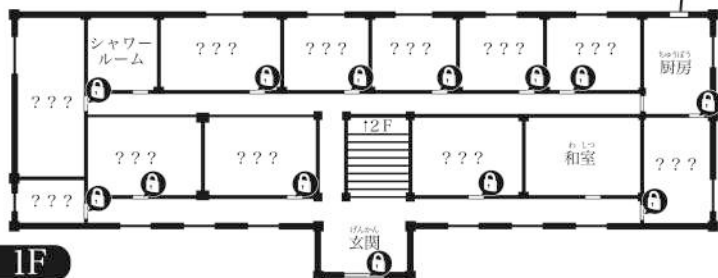
8月15日、ジェイルハウスに多数の警察関係者と思われる大人たちがやってきた。洋館内部の捜査をおこなっていたもよう。その際、報告者（レイカ）は大人たちの会話から「ブルーベリー色の怪物」の話を偶然聞く。



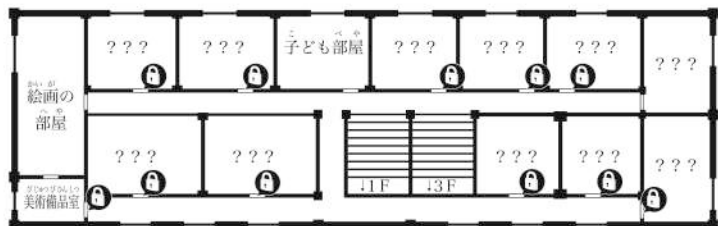
# ジェイルハウスの みとず 見取り図

🔒 鍵が閉まっている扉

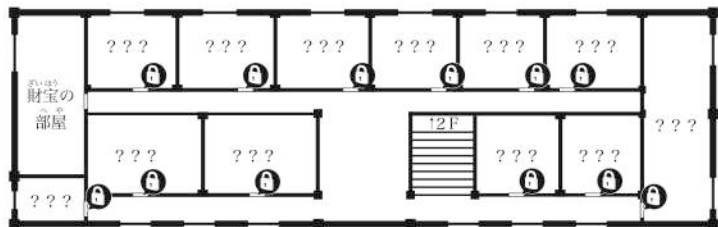
非常口



1F



2F



3F

# 1 オカルト調査クラブ

「——ジェイルハウスの怪物？」

八月十八日。夏休みが終わりに近づいた頃。

北部小学校二階の一番端にある、空き教室の中。

わたしにむりやり連れてこられた同級生の男子、優助はあきれたような様子で頬杖をつく。わたしの話をまったく信じていないようだ。

しかし、そんな優助の冷やかな視線にも負けず、わたしは力説する。

「そう！ 不気味な洋館『ジェイルハウス』に現れる怪物。この噂こそ、我がオカルト調査クラブの初めての調査対象として、ふさわしいと思わない？」

「オカルト調査クラブ、ねえ……」

熱く語るわたしの言葉を軽く聞き流して、優助は空き教室の中を見回す。

部屋の隅には古い教科書やプリントの余りなどが雑然と積み上げられていて、この部屋が普段物置として使われていることには、優助も気づいただろう。



部屋の中央には、わたしが近くの会議室から勝手に運んできた長机が口の字型に並べられていて、かろうじてクラブ室として機能している状態だ。

わたしと優助はそれぞれ机の両端に座つて、向かい合う形になっていた。

「夏休み中に、先生に内緒で立ち上げて、こんなホコリまみれの教室を使つてる時点でロクなクラブじゃないと思うんだけど」

「うっ……言つてくれるわね」

優助の指摘はもつともだった。

わたしが立ち上げた『北部小学校オカルト調査クラブ』は——実は、まだ学校から正式に認められていない。

——オカルト。



それは幽霊や超常現象、UFOや未確認生物など、現代の科学では証明できない事柄の総称だ。

どれも聞くだけでワクワクするものばかり！

この地球にはまだまだ説明されていない素晴らしい現象がたくさんある。

わたしの今一番の夢はそんなオカルト現象に実際に遭遇すること。その瞬間を思い描いただけでも胸が高鳴る。

だからオカルトの調査を本格的におこなうため、わたしはクラブを作ったのだ。

「オカルトとか、そんな変なものに俺を巻きこまないでくれよ、レイカ。昔からオカルトが大好きなことは知ってるけどさあ」

大きいため息をついた優助は再び息を吸った時、部屋の中に舞っているホコリを一緒に吸いこんだのか、ゴホゴホと激しくせきこんだ。かわいそう。

それはそれとして、レイカというのはわたしの名前だ。

北部小学校に通う五年生。自慢じゃないが、同級生たちからは『人形のように美しい美少女』と言われている。

……ただし、「口を開かなければ」という条件つきだけだ。

ちなみにわたしの向かい側に座つて、いまだにせきこんでいる男子は優助。

わたしの幼なじみで、普段は学校のサッカークラブに所属している。エースとしてチームを引っ張っているらしい。

今回、オカルト調査クラブとして本格的に活動を開始することにしたので、サッカークラブの夏休み練習会に来ていた優助のことを、むりやり引っ張ってきたのだつた。

なにしろ、オカルト調査クラブの正式メンバーはわたしひとりしかいないのだ。

どんな調査をするにせよ、ひとりだけではさすがに難しい。凶悪な未確認生物にでも出会ってしまった時のために、お互いの考えをよく理解し、協力しあえる仲間が必要だ。

その点、幼なじみの優助は最適な人物だつた。

ということで、優助にはサッカークラブの練習と並行して、こつちの活動も手伝ってもらおうと思ひ、わたしは練習後の優助を問答無用の力づくで引きずって連れてきた。ちよつぱり強引な誘い方ではあつたけれど、思つていたよりも抵抗されることはなかつた。

今だつていつでも逃げ出せるのに、優助は席に座つてわたしの話に付き合つてくれている。こういう時、なんだかんだ言つて、優助は最後まで話を聞いてくれるのだ。

「わたしね、最初は夏休み前にちゃんとクラブの設立届けを書いたのよ？ でも、メンバーがひ

とりじや認められないって先生に突き返されたの！ ひどくない？」

「そういう決まりなんだから？ それなら、ひどくはないんじゃないかな。というか、クラブに入つてくれるやつを募集すればよかつたんじやないの？」

「ようやくせきが止まつたらしい優助はあくびをしながら、だれもが真つ先に思いつくだろう方法<sup>ほうほう</sup>を提案<sup>ていあん</sup>してきた。

「……いなかつたのよ」

わたしは優助の質問<sup>しつもん</sup>に恨めしそうに答える。

「へ？」

「だから、いなかつたのよ！ オカルトを一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>に調査<sup>ちゆうさ</sup>してくれるつて人が！ ひとりも！ いなかつたのよー！ オカルトほど興味<sup>きょうみ</sup>をそそられるものなんて、この世<sup>よ</sup>に他<sup>ほか</sup>にないつていうのに……。みんな、もつと幽霊<sup>ゆうれい</sup>、未確認<sup>みかくにん</sup>生物<sup>せいぶつ</sup>、超常現象<sup>ちようじょうげんしょう</sup>に興味<sup>きょうみ</sup>を持つてもいいと思うの！」

メンバーの少なさを理由<sup>りゆう</sup>に却下<sup>きやくか</sup>されたクラブの設立<sup>せつりつ</sup>だったけれど、それ以前<sup>いぜん</sup>に先生<sup>せんせい</sup>はオカルト調査<sup>ちゆうさ</sup>という活動<sup>かつどう</sup>内容<sup>ないよう</sup>にも引<sup>ひ</sup>つかかっているようだった。

そのくらいのは、苦々<sup>にがにが</sup>しいあいそ笑<sup>わら</sup>いを浮か<sup>う</sup>べた先生<sup>せんせい</sup>の表情<sup>ひょうじょう</sup>から十分<sup>じゅうぶん</sup>察<sup>さつ</sup>することができた。

大人<sup>おとな</sup>たちは『オカルト』を信<sup>しん</sup>じていないのだ。

それどころか、オカルト関係の研究をしている人たちのことを「怪しい活動をしている人」だと思つてゐる節さえある。

わたしはまだ人類が解明できていない現象について、一生懸命研究している人たちのことは、尊敬に値すると思つてゐるのだけだ。

「レイカは、そのオカルトオタクなところさえなければ、かなりモテただろうなあ……」  
優助は遠い目でそうつぶやく。

わたしはその言葉にむつとして言い返した。

「わたし、別にモテたいなんて思つてないから。うちの学校の男子たちに好きになられるくらいなら、未確認生物に好きになつてもらつて交流できたほうが百倍うれしいわ！」

「そ、そうかあ……男子よりも未確認生物のほうがいいのかあ……」

わたしの強い情熱が伝わつたのか、優助は少し言葉に詰まつた様子だつた。

その妙な態度に少し違和感を覚えないうわけではなかつたけど、優助が黙つてゐる今が絶好のチャンス。

今回のオカルト事件について、わたしは切り出した。

学校非公認の『北部小学校オカルト調査クラブ』として最初に調査するのは『ジェイルハウス

の怪物』だ。

「ジェイルハウスの話に戻るわよ。この街の外れにある『一度入ったら二度と出てこられない化け物屋敷、ジェイルハウス』。その噂は優助も聞いたことくらいはあるでしょ？」

クラスメイトたちだつて、こういうちよつと怖い話に興味がないわけじゃない。むしろ、そういう身近な都市伝説はみんな大好きだ。

ただ、それを本気で調査するクラブには入りたくない、つて言われただけで……。

と、わたしが勝手に入部を断られた時のことを思い出して、少し落ちこんでいると、優助はそんなわたしを見て不思議そうな顔をしながらうなづく。

「もちろん俺だつて、その噂くらいは知ってるよ。クラスのやつらがよく話しているからな。で、そんな北部小学校のだけれもが一度は聞いたことのある、退屈な噂話を調べるのか？ レイカのことだから、もつとマニアックなネタを調査するものだと思つてたんだけど」

わたしだつて、みんなが学校で話しているような内容だけだつたら、調査対象には選ばなかつただろう。

だけど——本格的に調査したいと思ふきつかけになる出来事があつたのだ。

「ふふん。そのジェイルハウスの話がもし、ただの噂話じゃないとしたら？ それでも、退屈だ

つて言えるかしら？」

わたしのその言葉を聞いて、優助は少し興味を持ったようだった。

「なにかつかんだのか？ 今はだれも住んでいない廃墟をだれかが面白おかしく怖い話に仕立てただけで、ジェイルハウスはただの放置された古い屋敷だと思つてた。そうじゃないっていうのか？」

優助のさぐるような質問に、わたしは答える。

「そうよ。えーと、今日が八月十八日だから……五日前の話ね。数人の小学生が実際にジェイルハウスに入つて、化け物におそわれたらしいの」

「化け物におそわれた？ 信じられないな……。というか、レイカはなんでそんなことを知ってるんだよ？」

優助は首をかしげる。

「実はね、なにか大きな実績があれば、特別にクラブ設立を認めてもらえるんじゃないかと思つて、わたしはこの街のいろいろな都市伝説を調べていたのよ。なにかが出そうな夜に、家を抜け出してね。期待してなかったけど、ジェイルハウスの周辺もその流れで観察していたの」

あの時は本当に大変だった。

家をこつそり抜け出すのも大変だったし、家に帰った後はわたしがいなくなつたことに気づいて近所をさがし回つていたらしいお母さんにすごく怒られて、それはもう大変だったのだ。

「おいおい……。あんまり危ないことはするなよ？ ただでさえ、レイカはその……。なんだ、見た目だけはいいんだから、夜に街を歩いてたら、変な男に声をかけられたり、さらわれたりするかもしれないし……」

ちよつと顔を赤くした優助が注意してくる。

わたしのことを思つて言つてくれているのはわかるので、あんまりいやではない。優助は昔から不思議なくらい、わたしのことを心配してくれる。

だけど、危険をおかして夜に家を抜け出したことで、わたしは特別な体験をすることができたのだ。

「ご心配ありがとう。でもそのおかげで、わたしはついに目撃したの。本物のオカルト現象を」  
わたしの人生で初めて出会ったオカルト現象、それは――。

「――ジェイルハウスから現れた人魂が上空へと浮き上がって消えていったのを、わたしは見たわ」

「人魂？」

優助がまゆをひそめる。

「そう、人魂。あの光とも炎ともいえない、奇妙な発光体は絶対の絶対、本物の人魂よ。そしてその後、わたしはジェイルハウスの敷地内に子ども四人と小さな犬、それから大人がひとりいることに気づいた。おそらく、ジェイルハウスの中から出てきたんだと思う。普段は誰も近寄らないあの屋敷から人間が出てきたことと、出現した人魂の間にはなにかしらの関連性があるはずよ」

話が具体的になつてきたことで、優助は真剣な表情で椅子に座り直した。

「俺は、オカルト現象とかいうものは自分の目で見るまで信じる気はない。だからレイカの見た人魂の話について、俺の意見はまだ保留だ。でも、そうだな……あんな不気味な噂があるジェイルハウスから子どもたちが出てきたつてのは気になる」

見たものしか信じる気はない。

優助がそう考えるなら、それでもいい。

だってその考え方は裏を返せば、優助自身が目撃すれば、絶対に信じてくれるつてことだから。

「ジェイルハウスの話がただの噂じゃないと確信したわたしはその後数日間、夜の屋敷の様子を遠くから観察していたんだけど……」



「そうなのか——つて、夜に出歩いたのは一度じゃないのかよ!? 本当に危ないから、やめてくれよ……」

今度は優助の顔が青ざめる。表情が豊かなことはけっこうなことだ。友だちのわたしのことを心配してくれるのはうれしい。だけど、優助に止められても、やめられないことだつてある。

「いや。わたしはやめないわ。オカルトこそ、わたしの人生最大の趣味なんだから」  
はあ……と、優助はまた大きなため息をつく。

「それで監視を開始してから二日目、日付は八月十五日。警察関係の大人たちがやってきて、ジエイルハウス内部の捜査に入ったの。どう? わたしが夜にジエイルハウスの観察を続けた成果はちゃんとあつたと思わない? 捜査は日中でもいいはずなのに、わざわざ夜に警察が現れたのよ? なにか隠したい事件があつたと言つてるようなものだわ」

「たしかに。警察が出てきたとなると、ジエイルハウスの中でなんらかの事件があつたのは本当かもしれないな……」

あごに手を当てて考えこむ優助。

「ええ。わたしもそう思つて、警察の会話が聞こえるところまで見つからないようにこつそり移動したの。そしたら、興味深いことが聞けたわ」

「興味深いこと……?」

優助はいつの間にか話に食いついて、わたしの言葉の続きを待っていた。

オカルトに興味はないって言っていたのに、なんだかんだこうやって一緒に物事を考えてくれるから、わたしは優助のことをとても気に入っている。大切な幼なじみだ。

そんな優助に、わたしは少しもつたいぶつてから言った。

「『ジエイルハウスに——ブルーベリー色の怪物が出たという通報があった』。警察関係者たちはそう言っていたの」

その会話が、わたしを本格的にやる気にさせた。

今までは半信半疑で調べていたが、その時点からわたしは本気で調査する決意をしたのだ。ジエイルハウスの怪物というあいまいな表現の都市伝説は以前からあったけれど、「ブルーベリー色の怪物」という具体的な単語が出てきたのは初めてのことだったのだから。

「ブルーベリー色の怪物? なんだか気持ち悪い表現だな」

優助が顔をしかめる。

警察の話聞いた時、わたしも同じ感想を抱いた。うまく言葉にできない、ゾワゾワとする気持ち悪さが胸の中を支配するのだ。

生き物とブルーベリー色という表現の相性は最悪みたいだ。

ブルーベリー色。つまり、青紫色の体色を持つ大型生物は見たことがない。気持ち悪さを感じるのは事実だ。だが、それ以上に興味が勝っていた。

どんな質感で、どんな動きをして、どんな声で鳴くのか。

考え始めたら、調べてみたい事柄はいくらでも思いつく。

「以前からあるジェイルハウスの噂、わたしが見た人魂、警察の話に出たブルーベリー色の怪物。間違いないわ、ジェイルハウスはオカルト現象の宝庫よ！ その確信が持てたから、わたしはこうして優助をサッカークラブからむりやりここまで引っ張ってきたってわけ。オカルト調査クラブ、本格始動よ！」

「話が読めないんだけど……？」

不安そうな優助に、わたしはとても簡潔に結論を伝えた。

「潜入しましょう」

「ちよつと待て!？」

優助が慌てて椅子から飛び上がる。

そんな優助に向かって、わたしも堂々と立ち上がると大声で宣言した。

「わたしたち、『オカルト調査クラブ』はジェイルハウスに潜入する！　そして、オカルト現象の謎を見事解き明かしてみせるのよ！」

しん、と静まり返る室内。おどろきで固まった優助は数秒後、口の字型の長机の向こう側から素早くわたしの近くまで詰め寄ってきた。

「わたしたち、つて、なんか俺も含まれてないか!？」

優助はようやく状況を理解したようだ。

だが同時に、優助はじつとわたしの瞳をのぞきこみ、当然の疑問を口にした。

「なあ、ここまで調べておいて、なんでひとりですぐに潜入しなかつたんだ？」

その質問に、わたしはギクツと肩を震わせる。

「さ、さすがにわたしひとりで潜入するのは……なんていうか？　心細いつていうわけじゃないのよ？　……いや、ひとりでもいいんだけどね？　優助もブルーベリー色の怪物を見たいかな、

つて思つて」

「本当にそんな理由か？」

じりじりと詰め寄られて、しどろもどろになるわたし。

そして、

「怖いんだろ」

ついに直球で突っこまれて、わたしはぐつと言葉に詰まった。オカルト現象は好きだ。いろいろな怖い話を聞くのも好きだ。でも、いざ本物に会いにくくなると、さすがに怖い。勇気がちよつと足りない。

つまりは、凶星だ。

「ま、その……少しは怖いかもしれないわね……」

わたしは視線を逃がすように窓の外を見ながら、小さな声でぼそつと本音を白状した。空き教室を沈黙が支配する。

な、なにか言っつてほしい……！ とわたしが心の中で動揺していると、

優助は肩をすくめて、

「わかつたよ。俺も一緒に行く」

と言った。

「ほんと!？」

わたしは目を輝かせる。

「レイカをひとりでジェイルハウスに行かせて、万が一、なにかあったら後味が悪すぎるからな。オカルト関係なしに、危ないやつがひそんでいる可能性だつてあるわけだし」

「優助がいてくれれば心強いわ！ ありがとっ」

「まあ、これでも幼なじみだからな。レイカを危険にさらすわけにはいかないよ」

自分も運動神経は悪くないほうだが、優助はサッカークラブのエースなだけあつてかなり身体能力が高い。オカルト現象によつてなんらかのピンチに陥つても、ふたりで力を合わせれば乗りきることができらるだろう。

わたしは安心してほつと息をつくと、笑顔を浮かべる。

これで優助もついてきてくれることが決まつた。やつとジェイルハウスに潜入することができらる。

それは怖くもあり、楽しみでもあつた。

「でもさ、その怪物の件、ジェイルハウスから出てきた子どもたちのイタズラつて線もあるんじゃないのか？ 怪物については嘘をついてるとか、レイカが見た人魂もなんらかのトリックだつたりとか」

当然の疑問を優助は投げかけてくる。しかし、そのくらいの可能性はわたしも検討済みだ。

そしてわたしは、今回の件については信ぴょう性があると思つていた。

それにはきちんとした理由がある。

「わたしはイタズラの可能性は低いと思つてる。——だつて、ジェイルハウスから出てきた子どもたちの中には、あの有名な『ひろし君』がいたんだもの」

「ひろし？　うちの学年の、変わり者で有名な？」

「そう。あの、天才少年のひろし君」

ひろし君は北部小五年生の間——どころか、学校中で有名な男子だ。

同じクラスになつたことはないけれど、生徒だけじゃなく先生までもが彼のことを「天才で、

変わり者の少年」と呼ぶことから、その異質さはわかるだろう。

頭脳明晰で、その知識量は大人顔負け。

ただどその代わりに、いろいろな感覚がまわりとずれている。

なにか気になるものを見つけると、それを追いかけて調べようとするみたいで、体育の時間など外に出る授業の時は、たいてい珍しい鳥や虫を見つけてどこかに消えてしまふらしい。

とことん変わった少年だ。

ひろし君はそんな他人からの評価をまったく気にしていないようだけど。

わたしも勉強の成績はかなりいいほうだと思っけれど、ひろし君には全然かなわない。というか、ひろし君に勝てる小学生なんていないんじゃないかとすら思う。

そして、そんなひろし君はとも論理的に話す。興味を持つ部分は周囲とずれていることが多ければ、彼が口にする言葉はすべて筋が通っている。

いつも冷静で、うちのクラス男子とは精神年齢が十歳くらい違いそうだ。

断言できる。ひろし君はイタズラで嘘をついて、面白がるような子じゃない。

だから、わたしはこの件に関する情報は本当だと思っっている。

「……仮にブルーベリー色の怪物の話ひろしが警察に伝えたのなら、イタズラっていう可能性はたしかに低いだろうな。たまにクラス合同の体育とかで見かけるけど、アイツがイタズラしているところなんて、逆に見てみたいくらいだし」

優助もわたしと同じで、一年生の時から今まで一度も、ひろし君と同じクラスにはなっっていないが、彼の特殊な性格については十分知っっているようだった。

「だとしたら、ブルーベリー色の怪物は実在する……？ いや、そんなわけないよな……。だっどそれなら、なんでひろしはそんなことを言っただんだ？」

難しい顔で考えこむ優助だが、ここで頭を悩ませせていても、答えが出ることはないだろう。



ジェイルハウスに潜入すればすべてがわかる。

だけど、そのためにはいろいろと準備をしないとイケない。

「まずは情報収集をしましょう。本当に怪物がいるなら事前の情報収集はとつても大事。そういう化け物系の未確認生物相手に、なんの作戦も立てないで正面からぶつかつても、初めから勝ち目がない場合が多いし」

「どこ情報だよ……」

「愛読しているオカルト雑誌！」

「——というか、倒す気なのかよ！」

信じられないといった優助の視線に、わたしはにらみ返すことで抗議する。

「倒す、とまではいかななくても、『ホカク』できればいいとわたしは思っているわ」

「『ホカク』？」

優助は単語の意味がわからなかったようで首をひねった。

「ああ、『ホカク』は捕まえる、つて意味よ。怪物をホカクできれば、その存在を世に知らしめることができる！ そうすれば、我がオカルト調査クラブも正式なクラブとして、学校に認められるはずよ！」

「あー、そういうことか」

わたしを見る優助の目つきがすつと細くなった。優助はなにかを見破ったというふうには、ふつと小さく笑う。

「——レイカ、さてはそれが一番の目的だな？」

「あ、あはは……」

思わず本音がもれた。

そう言われてしまえば、そうとさえなくもないけど、そんな打算的な考え方をしているわけじゃない。わたしは純粹にオカルト現象と向き合おうと思っっているのだ。

決して、『オカルトを調べながらクラブも作ることができて一石二鳥！』なんて思っていない。

……ほんとだよ？

「ま、お前がクラブを作るのを邪魔する気はないからいいけどさ。で、情報収集つてなににするんだ？ これ以上、ジェイルハウスを外から眺めてても、新しい情報は手に入らないだろ？」

わたしの思惑を見破った優助は、あきれ顔を浮かべたままだけれど、この件にはそれ以上触れないでくれたので助かった。

くだらないからやつぱり手伝うのをやめる、とか言われたら、もう一回説得するのはかなり大

変だっただろう。

「優助の言う通り、これ以上ジエイルハウスの観察をしても意味がないと思う。だから、今日は情報収集の基本中の基本、聞きこみをするわよ」

「聞きこみって誰に？」

「ちやうどいい人物がいるじゃない」

本気で心当たりがないといった感じで首をかしげる優助に、わたしは自信満々の笑みを浮かべて教えてあげることにした。

わたしが知る中で今一番、真実に近い情報を持っているはずの人物の名前を。

「——それはね、ひろし君よ」